

前時までの経験から、Aさんは自分の作ったおにぎりをプレゼントすることを楽しみしていた。そんなAさんにとって、プレゼント相手の写真は、活動中でもプレゼントを渡す自分の姿を常にイメージするために有効な情報となっていた。だから、上記のような育ちの姿が見られたのだと考える。

◇できる状況づくりにかかわって

【児童の育ちの姿（本時より）】

（Bさん）困ったときに自分から先生に助けをもとめることができた姿

- ・自分専用の机や道具を活用して一人でどんだんみそしる作りを行うBさん。硬いジャガイモを切る場面で、近くに立っていた担任の先生に、自分から「先生お願いします」と声をかけて切るのを手伝ってもらった。

【育ちを支えた支援にかかわる考察】

担任はBさんが満足感を感じることができるよう、Bさんの身体機能を考慮して、様々な補助具を作成していた。しかしどうにも一人ではできない活動もあった。そのような活動について担任は、できないところを「手伝ってください」と自分から頼めることも自立の姿ととらえた。そして、本時Bさんが担任に依頼するような場面をいくつか設定し、Bさんが頼みたくなるときにはBさんの近くにさりげなく立つような支援を行った。本時、Bさんが上記のように担任に自分から依頼できたのは、担任との日頃の信頼関係と、困ったときに担任の姿が視野に入り、『先生に頼ればこの課題を解決できる』という見通しをもてたからだと考える。

研究委員会では、この実践から「できる状況づくり」とは、補助具だけではない、教師の立ち位置も大事な状況だということを学ぶことができた。

◇上記の実践から明らかになった本年度研究の成果

- ・児童の育ちを支える支援を考える上で、前時までの姿を適切に評価し個別の指導計画の「指導の方向」を活用することの有効性を確認することができた。
- ・児童の育ちにつながる評価の視点を確認することができた。
- ・その児童の実態に応じたできる状況作りの重要性和、補助具以外の「状況」の視点について確認することができた。

4 来年度への課題

来年度も本年度研究テーマを継承（3年目の取り組み）し、特に以下の2点に焦点を絞って研究を深めていきたい。

◇ 児童生徒の育ちにつながる評価のあり方

その子その子に合った細やかな評価項目（評価基準）を設定する試み教育課題との照らし合わせ（生活や教科面の育ち）評価を生かした個別の指導計画の修正など

◇ 児童生徒の育ちにつながる「できる状況づくり」の工夫

教師が児童生徒の活動を「禁止」する必要のない、児童生徒が自分でやっていることを自覚し、その活動に満足感を感じることが出来る「できる状況作り」教師の立ち位置、声かけ、表情、目線の高さなど、補助具以外の支援のあり方